

Title	<書評>簡月真(著)『台湾に渡った日本語の現在 リンガ フランカとしての姿』東京：明治書院、2011、162pp.
Author(s)	落合, いずみ
Citation	京都大学言語学研究=Kyoto University Linguistic Research (2015), 34: 109-115
Issue Date	2015-12-31
URL	https://doi.org/10.14989/218950
Right	© Department of Linguistics Graduate School of Letters 2015
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

簡月真（著）『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』東京：明治書院、2011、162pp.

落合 いずみ*

【キーワード】リンガフランカ 日本語変種 台湾南島諸語 閩南語 客家語

1 はじめに—日本統治下の台湾における日本語談話の一例

半世紀に亘る台湾の日本統治時代（1885年から1945年まで）において、日本語を母語としない人々が日本人と話す際に用いていた日本語はどのようなものだったろうか。その一端を窺える資料が川見（1942：34）による中流階級の日本人女性と漢民族（閩南人）の行商人の談話資料に見出せる。日本人の婦人は日本語の母語話者でない行商人の使う日本語変種に合わせた話し方をしているということである¹。

婦人 「リー（汝）や、チレ（此）幾ラアルカ」

商人 「チレ（此）。一斤十五銭アル」

婦人 「タカイタカイアイアルネ、マケルヨロシイネ」

商人 「タカイナイヨ、オッサン [奥さん]、ロコモ [何処も] 十五銭アルヨ、アナタ、ワタシ、ホーユー（好友）アル、ヤスイアルヨ」

婦人 「ウソ言イイナサイ。ドコノ野菜屋モ十二銭アルヨ、リー（汝）ノモウ買ワンヨ。外ノ買フカライランヨ」

商人 「ホー（好）、ホー（好）、ヨロシ、ヨロシ、オッサン、マケルアルヨ。イクラ買フアルカ」

日本統治当時、このような日本語変種が話されていたことが想像されるが、終戦で日本人が台湾を去った後も、異民族同士のコミュニケーションの手段として日本語変

* 本稿の執筆にあたり、植田尚樹氏と査読者のおひとりに助言をいただいたことにお礼申しあげる。不備は筆者の責任である。

¹ 川見（1942）の表記をほぼそのまま示したが、いくつか変更を加えた。まず、会話の理解を助けるため句点を加えた。川見による閩南語の説明は括弧で、日本語での説明は〔〕で示す。ホーユーの漢字表記を朋友としているが、本稿では好友と改めた。

種は使われ続けてきた。日本統治終了から 33 年後の文献、Young (1988) には台湾の異なる種族間のリングフランカとして日本語が用いられているとの報告がある。台湾は多民族から成り、それぞれ異なる現地語を話す。漢民族（閩南人と客家人）とオーストロネシア系の民族（アタヤル族、セデック族、サイシャット族、ブヌン族、サオ族、ツォウ族、アミ族、パイワン族、プユマ族、ルカイ族、ヤミ族など）の言語はどの 2 つをとっても通じ合わない。そのため、種族間での共通言語として日本語が選ばれた。しかし、終戦で日本人が台湾を去った後、台湾の日本語は独自の変化を遂げた。日本人による日本語のインプットが絶たれ、異なる現地語を母語とする人たちがお互いの日本語変種を理解しやすいように変更が加えられてきた。本書は、日本語と断絶してから 66 年経った台湾日本語の現状を、人称代名詞（第 4 章）、可能表現（第 5 章）、否定辞（第 6 章）、丁寧体（第 7 章）、新情報認知要求の用法（第 8 章）といった視点から描いている。同書の主要な部分であるこれら 5 つの章から、本稿は、九州方言の影響を受けた否定辞、様々な構文が用いられる可能表現、新情報認知要求として働く「でしょ」の用法の 3 つの章を紹介する²。

2 本書の背景・研究手法

本書は 2009 年 10 月から 2013 年 9 月まで 5 年に亘って行われた、真田信治氏をリーダーとする人間文化研究機構国立国語研究所の基幹型共同プロジェクト「日本語変種とクレオール形成過程」の研究成果のひとつであり、真田信治氏監修の「海外の日本語シリーズ」全 3 巻中の第 1 巻である。シリーズ第 2 巻はマリアナ諸島の日本語変種（ロング・新井 2012）を、第 3 巻はサハリンの日本語樺太方言を扱っている（朝日 2012）。真田氏はシリーズ発刊の辞において、台湾の日本語変種には九州方言が、サイパンの日本語変種には沖縄方言が、サハリンの日本語変種には北海道方言が影響を与えたと述べている。簡によれば、台湾の日本語変種に見られる九州方言の影響は、否定辞に顕著である。

そのまえに、簡の研究方法について説明しておく。簡は花蓮縣、宜蘭縣、台東縣、屏東縣、南投縣において、合計 20 名の台湾日本語話者に対し調査を行った（20 名全員のデータを考察しているのは「でしょ」の新用法だけであり、その他は 20 人中 8 人のデータを用いている）。最も高齢の調査協力者が 1923 年生まれ（2015 年現在 92 歳）、最も若年の調査協力者が 1942 年生まれ（2015 年現在 73 歳）である。種族別に言うと、ブヌン族 4 人、アタヤル族 3 人、アミ族 3 人、閩南人 3 人、パイワン族 2 人、客

² 他に特筆すべきこととしては、第 4 章で一人称代名詞の閩南語からの借用が述べられていること、第 7 章で主節と従属節における丁寧体の分布が述べていることである。

家人 2 人、ツォウ族 1 人、ルカイ族 1 人、タオ族 1 人である³。調査方法としては、2 つの場面において談話を収集した。ひとつは台湾の異なる種族同士の人がリングフランカとして日本語変種を話すレジスター（リングフランカレジスター）であり、もうひとつは台湾の人が日本語母語話者の日本人（この場合は調査者）に話すレジスター（対母語話者レジスター）である。総データ量は 25 時間であった。簡は、否定辞、可能表現など各構文の考察に、二つのレジスターによる表現の違いも加えている。しかし、日本語を母語とする調査者に対して用いる日本語変種のレジスターは、互いの背景・言語・身分の違いが大きすぎるため、普段使うリングフランカとは異なる種類の言語であると評者は考える。本書評の目的は、リングフランカとしての日本語変種の紹介にとどまるため、対母語話者レジスターの考察は省く⁴。

3 台湾日本語の否定辞「ナイ」と「ン」

(1) 閩 S わー、当時、このダブダ（ラブレター）書くの一流ですよー。{笑} ダベタ（ラブレター）。{笑} 結局ね、これなげー（「長いこと」にも聞こえた）書カントネ、書カナイト、言ワナイトネ、もうみんなほとんど忘れていますよ。（本書 97 頁）

否定辞の考察（本書第 6 章）は簡（2006）を基にしている。談話（1）にあるように、台湾の日本語変種の否定辞には「ナイ」（書カナイ）と「ン」（書カン）のふたつが使われる。このうち「ン」は西日本方言を反映した形式だと述べている。簡は「ナイ」と「ン」の分布を調べた結果、この二つの明らかな使い分けを見出した。それは、「ン」は五段動詞のみに表れるということである。非五段動詞、つまり一段動詞、カ変動詞、サ変動詞の場合は、「ン」は用いられず、「ナイ」のみを使う。五段動詞には「ン」も「ナイ」も用いられる（五段動詞における「ン」と「ナイ」の比率は 54.4 パーセント対 45.6 パーセントであった）。現在の分布に至った経過を簡は以下のように考察する。

1. まず、日本統治時代において、教育機関での日本語教育ではすべての動詞に「ナイ」を付けることで否定を表すと習得したはずである。
2. しかし、日常生活においては、主に九州の方言に接する機会が多く、すべての動詞に「ン」を付けて否定を表す形式もインプットされた。
3. そして、「ナイ」と「ン」が併用される過程で、「ナ

³ 本書の談話資料において、調査協力者はローマ字 1 字で表されているが、本稿では種族も加えて表す（例：ア T「アミ族 T 氏」（「ア」はアミ族に用いる。本稿でアタヤル族のデータは引用していない）、閩 S「閩南人の S 氏」、ブ F「ブヌン族 F 氏」）。「調査」は調査者の発話を示す。

⁴ 談話データはできるだけ簡の表記に忠実に示した。簡が用いる談話表記は、○：人名、{ }：非言語行動、()：著者による訳や注記、英字小文字：閩南語、である。

イ」は非五段動詞に、「ン」と「ナイ」の両方が五段動詞に使われるという棲み分けが生じた。これと全く同じ否定辞棲み分けの現象は、ボリビア日系人の日本語（白岩他 2010）や奄美方言（濱中 2006）、北海道・新十津川方言（平塚・水谷 2008）にも報告されていると紹介している。

4 台湾日本語の可能表現

可能表現の考察（本書第 5 章）は簡（2010）を基にしている。台湾の日本語変種には大きく分けて 5 種類の表現が使われる。8 人すべての調査協力者が動名詞デキルを用いる（2）⁵。8 人全てが動詞派生形による可能表現（3）も用いるが、能力差が大きく派生動詞を生産的に作れない話者もある（8 人中 3 人が動詞派生形をうまく使えない）。そのかわり、これらの人は「動名詞ル形＋デキル」という迂言的な方法を用いる（4）。

(2) 閩 S kam-tsia 植えたあと、えーまあ、hiu、hiu-king デキル（「甘蔗」を植えたあと、えーまあ、休耕できる。）（本書 76 頁）

(3) ア T あれで、もう船ないから、日本行カレナイ。（本書 73 頁）

(4) 閩 L これ lan（われわれ）なんか言わないなったら書クデキナイ。あ、書クデキナイナッタラ、試験スルデキナイ。あ、これ何十万字ほしいだから。（本書 77 頁）

また、「デキル」の汎用が多くの話者（8 人中 6 人）に見られた（5）。これは、標準的日本語ならば動詞派生形を用いるところを「デキル」の一語で代表させるため、文脈に依存した解釈が求められる用法である⁶。さらに「デキル」に関して、すべての調査協力者がスルコトガデキルの形式を用いる（6）⁷。

(5) 閩 L 台湾のん、歌、li（あなた）歌デキル？

ア Y もう、もう歌、あの一、聞いただけよ。gua（私）デキナイ。（本書 79 頁）

⁵ 動名詞とはスルをつけて動詞にできる形式のことらしい。「連絡」、「仕事」も動名詞として挙げられている。

⁶ 談話は途中の部分を省略している。

⁷ 本書に挙げられている「デキル」の汎用の例は（5）も含め、標準日本語でも文脈によっては可能であると母語話者から意見を受けた。そこで筆者の台湾での体験から例を挙げる。運転手（閩南人）が助手席の人（日本人）に、フロントガラスのワイパーに挟まった駐車チケットを取ってほしいとお願いして、助手席の人が手を伸ばしたときに、運転手が「デキル？」（「取れますか」、「届きますか」の意味）と言ったのは、まさに「デキル」の汎用だろう。

(6) 閩 S 今まで、あんまりー、山におー、山におった場合、この山下に、この並置に来ルコトデキナイ ma (んだよ)、当時は、日本当時。(本書 80 頁)

簡は可能表現の推移について、このように考察している。1. まず派生動詞形式という統語的な構造が衰退した。2. その代替として「動詞ル形+デキル」のような分析的な構造が生じた。3. さらに、文脈に依存する「デキル」が汎用されるようになった。

5 台湾日本語の新情報認知要求「でしょ」

「でしょ」の新用法についての考察(本書第8章)は簡(2009)を基にしている。簡は、例えば「デキル」の汎用など、台湾の日本語変種に見られる変化の多くを、摩滅に向かう言語に特徴的な単純化として捉えている。しかし、「でしょ」の新用法に限り、単純化ではなくて改新だと述べている。本来、「でしょ」は、推量(7)、または確認要求に用いられる。さらに後者は命題確認の要求(8)と知識確認の要求(9)に分かれる(三宅 1996、1997)。「でしょ」にはほかに、「でしょう」、「だろう」、「だろ」などの形式がある。

(7) 明日は雨が降るだろう。(三宅 1997)

(8) 「金沢、寒かったでしょう」「ええ、雪がいっぱい降ってて」(三宅 1996)

(9) そんなのきなことと言っている場合じゃないだろ。(三宅 1996)

台湾の日本語変種にもこれらの用法はあるのだが、その他に新情報認知要求(真田 2007)という用法が加わっている。この新用法には、聞き手が知るはずのないことを新情報として導入したうえで、談話を展開していくという働きがある(10)。

(10) 調査 みんなが先生の宿舎の掃除とか風呂焚きとかてつだったりしましたか？

ブ F しましたよ。

調査 そうですか。

ブ F ん。この一〇先生と非常に、その、あのお父さんみたいにこう、可愛がってくれたでしょ {笑}。

調査 はいはい。(本書 131 頁)

まとめると、台湾日本語において「でしょ」は推量、確認要求以外に、新情報認知要求ある。さらに、ミクロネシア(ロング他 2007)、サハリン(津田・真田 2006)といった日本の旧植民地でも同形式が新情報認知要求として用いられていると紹介している。

6 おわりに

台湾におけるリングフランカにも時代による変遷がある。Li (1996) は、台湾南西部のシラヤ語（台湾南島諸語、消滅）や北部のバサイ語（台湾南島諸語、消滅）などは、近隣の台湾南島諸言語母語話者も用いるリングフランカであった時代（17 世紀ごろ）があり、日本統治時代には日本語がリングフランカとなり、日本統治時代終了後には、中国語とともに台湾日本語がリングフランカして用いられると述べている。

本稿では、台湾日本語の文法的側面から否定辞、可能表現、「でしょ」の新用法を紹介した。本書収録の談話データは日本語母語話者にとっても、接触言語の研究者にとっても興味深いものだろう。ただ、談話の前後文脈が示されていないことや、データが独自の表記方法で提示されていることにより（脚注 4 参照）、日本語の母語話者であっても、談話データの理解が困難である。標準日本語訳をつけるなどの工夫があるとさらにわかりやすかっただろう。

本書のおわりで、簡は台湾において日本語との接触によって生じた現象は次の 3 種に分けられると述べている。(A) 現地語と日本語とのバイリンガルの発生、(B) 現地語の中への日本語要素の借用、(C) 現地語と日本語の接触による新しい言語（クレオール）の形成である。本書はこの 3 つのうちの (A) について論じたものであると述べているのだが、実際の内容はバイリンガルについてではなく、リングフランカとしての台湾日本語についてのものである。母語としての現地語について議論はなされていない。最後に、今後は (B) と (C) に関する研究が求められるとまとめている。

参考文献

- 朝日祥之 (2012) 『サハリンに残された日本語樺太方言』 [海外の日本語シリーズ 3]
東京：明治書院。
- 川見駒太郎 (1942) 「台湾において使用される国語の複雑性一附、方言の発生一」『日本語』2 (3) : 32-39.
- 簡月真 (2006) 「台湾残存日本語に見られる否定辞『ナイ』と『ン』—花蓮縣をフィールドに一」『日本語科学』20 : 5-25.
- 簡月真 (2009) 「台湾日本語にみられる『でしょ』の新用法」『社会言語科学』11 (2) : 28-38.
- 簡月真 (2010) 「台湾高年層の日本語における可能表現」『地域言語』21 : 34-51.
- 真田信治 (2007) 「残留日本語の調査研究について」津田葵・真田信治・工藤真由美 (編)『言語の接触と混交』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイ

- スの人類学」研究報告書：337-345.
- 白岩広行・森田耕平・王子田笑子・工藤真由美（2010）「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触」『阪大日本語研究』22：11-41.
- 津田葵・真田信治（編）（2006）『言語の接触と混交—サハリンにおける日本語の残存』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人類学」研究報告書.
- 濱中誠（2006）「奄美方言話者の使用する否定辞を含む表現の特徴」真田信治（編）『薩南諸島におけるネオ方言（中間方言）の実態調査—「奄美」—』平成 15-17 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究結果報告書：63-68.
- 平塚雄亮・水谷美保（2008）「北海道・新十津川方言の否定辞」真田信治（編）『北海道・新十津川方言の現在』15-22. 大阪：大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室.
- Li, P. Jen-kuei (1996) The *lingue franche* in Taiwan. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler, Darrell T. Tryon (eds.) *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*, 741-743. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89：111-122.
- 三宅知宏（1997）「『愛だろ、愛っ。』—推量と確認要求」『言語』26（2）：68-73.
- ロング・ダニエル、新井正人（2012）『マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴—』[海外の日本語シリーズ 2] 東京：明治書院.
- ロング・ダニエル、小松恭子、新井正人、米田早紀（2007）「サイパンの日本語について—実態調査の中間報告—」『人文学報』382：15-39.
- Young, Russel (1988) Language maintenance and language shift in Taiwan. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 9(4)：323-330.

受領日 2015年5月6日
受理日 2015年6月25日